「アジア・キリスト教・多元性」研究会
第18号　2020年3月　45～58頁

書 評

役重善洋著
『近代日本の植民地主義とジェンタイル・シオニズム
── 内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識──』

インパクト出版会　2018 年 3 月
Ａ５判 399 頁　3,700 円＋税

岩 野 祐 介

本書は、役重善洋（以下、著者と記す）による学位申請論文をもとにした単行本である。2018年にインパクト出版会より刊行された本書は、同年のキリスト教史学会賞を受賞した。キリスト教史研究の立場からも、大いに注目された著作である。とはいっても、本書は神学書ではない。著者によれば、「思想史研究」（本書14頁、以下のカッコ内数字も同様）には収まりきらないが、「植民地主義批判の論理を深めること」（397）が「とりあえずの目的」（同）とされている書物である。以下では、そのような本書からの批判や問いに対して、神学、キリスト教学の立場から、応答することを評者として試みたい。

本書の構成は以下の通りである。

序論
第一章　植民地主義・民族・キリスト教
第二章　内村鑑三におけるシオニズム論と植民地主義
第三章　矢内原忠雄の再臨信仰とシオニズム
第四章　エルサレム宣教会議と植民地主義
第五章　中田重治のユダヤ人観と日本ホーリネス教会の満州伝道
結論

序論では、シオニズムとキリスト教世界との関連性等、本書が扱うテーマの全体的背景について説明され、またジェンタイル・シオニズム、ディスペンセーショナリズムといった専門的用語の定義がなされる。なお、本書において扱われるテーマは実に巨大なものである。本書を読み進めるうち、本書全体のテーマについて、あるいは、各章の関係性はどのようになっているのか、といったことについて、読者の側が見失ってしまうおそれがある。よって、序章において、書籍全体の意図をはっきり示しておいてもよかったかもしれない。たとえば、第五章の小括にある問題意識が序章等で明解に示されていれば、読者が「いま読んでいる箇所は全体のなかでどのような意味をもつ箇所なのか」を意識しやすかったのではないだろうか。第五章の小括にある問題意識とは、以下のようなものである。

> 「……「歴史の流れ」に目を閉ざし、大局的視点を失ったという意味では、ホーリネス教会を利用していた戦争指導者も、戦争はいやだと思いながらも気づいたときには協力する以外の術を知らなかった一般庶民も、それぞれの立場に相応する自己検証があってしかるべきであった。しかし、第二次世界大戦後の日本において、そうした知的・倫理的な検証作業は、植民地の強制的喪失と冷戦への参入という状況の中、極めて限定的なものにとどまったように思われる。だとすれば、現在を生きる私たちもまた、歴史がどこに向かっているのかを把握する大局的視野と他者の苦難への感受性を失っていないか、厳しく自問することが必要であろう。その問いはまた、重層的な差別と抑圧のシステムに自ら組み込まれ、加担することを容認する生き方をしてはいないのだろうか、という問いでもある」（340）

歴史の流れを見失わないようにありたい、という著者の意図はまったく妥当なものである。とはいえ、「歴史がどこに向かってどう流れているかまったく無知だった」のは、ホーリネスの信徒だけではない。内村や矢内原のような、当代きっての知識人であっても、その後の歴史を経て振り返ってみれば、歴史の流れを見失ったような行動をすることがあったのである。当然、それは現代を生きる我々にも当てはまることである。本書はそれを強く意識させる。

以下は各章の概要である。

第一章は、植民地主義・民族・キリスト教それぞれの関係について、世界史的状況、とくに海外の状況について概説的に述べている。キリスト教史、歴史神学の文脈では扱われないことがらについての記述も多く、評者にとっても学ぶところが多かった。

第二章では、内村鑑三のテキストを引用しながら、そのキリスト教理解の特徴を挙げ、内村におけるシオニズムの影響を解き明かしている。同様に、第三章では矢内原忠雄におけるキリスト教理解を扱っているが、他章と比較しても分量としては少ない。矢内原のキリスト教理解に関する書物、たとえば近年出版された赤江達也著『矢内原忠雄　戦争と知識人の使

命』（岩波新書、2017）、川中子義勝著『悲哀の人　矢内原忠雄　歿後五十年を経て改めて読み直す』（かんよう出版、2016）等と併せて読むことにより、読者の理解は深まるであろう。

第四章は第一章に似た構成の、概説的内容となっている。欧米の教会や超教派キリスト教組織の立場、彼らのユダヤ観とイスラム観、植民地観を明らかにし、またそのそれぞれが日本における植民地観にどう影響しているか、両者のどこがどう似ているか、について論じた内容である。とくに、エキュメニカル運動の背景には対イスラム・対社会主義という意図があるのではないか、という指摘は重要であるだろう。日本におけるエキュメニカル運動の歴史研究において、必ずしも注目され、検証されてはこなかった要素だからである。

第五章は中田重治のキリスト教理解と、シオニズムからの影響に関する詳細な記述となっている。中田は「満州」伝道に力を入れていたが、本章ではこのことについて、直接的にパレスチナを目指すのではなく、「満州」を通過して遥かパレスチナまで至る、というシオニズムの影響を受けた思想を展開している、と解釈している。「満州」と「パレスチナ」という一見無関係な二つの土地が、中田のキリスト教理解においては同一線上にある、というのである。本章での中田理解に関して、ホーリネス研究の立場、ホーリネス内部の立場からどのような反響があるのかも興味深いところである。

そして結論においては、図表なども用いながら本書の内容がまとめられる。すなわち、欧米の植民地主義は、「日本」および「ユダヤ（シオニズム）」を中間的エージェントのように使役して、アジア、パレスチナを搾取する構造をもっていたこと。そして、日本、ユダヤは、それぞれの宗教的なナショナリズムを用いて、植民地主義に組み込まれ、それを正当化していたこと、である。

以上のような本文五章構成の本書であるが、扱うテーマの巨大さから、その部分それぞれについて、もっと詰めた議論が必要だったのではないか、また前述のとおり各章相互の関係性についても、読者に対するもう少し丁寧な説明があってよかったのでは、と思わされる部分があることも確かである。

特に評者が疑問に感じたのは、ヨーロッパにおけるシオニズムの問題と、日本における、日本の朝鮮・中国・アジアに対する植民地主義とを、どこまで関係づけることができるのか、という点である。シオニズムと大日本帝国の両者とも、欧米（特にアメリカ、イギリス）の植民地主義の影響を受けており、その構造に組み込まれている。そのなかで、ユダヤはパレスチナにおいてアラブに対して、日本は東アジアにおいて朝鮮・台湾・中国に対して、植民地支配をおこなう。その際には、欧米列強も植民地支配をしている、また、欧米列強からの収奪を避け、独立性を保つために、一定の経済的・軍事的な力を維持せねばならない、という理由で自らの植民地支配を正当化しようとしているのである。以上のような点で、シオニズムと大日本帝国とには相似性、類似性があると本書は主張する。その主張は説得力がある

ものである。

しかし、相似性、類似性があるからといって、同種・同根の問題であるといえるか、という点については、さらなる考察が必要であるだろう。評者としては、ユダヤがパレスチナを植民地化する際の正当化のロジックと、日本が朝鮮・中国を植民地化する際の正当化のロジックに同質性があるとしても、その背景となるユダヤ教と、国家神道・天皇制とを、同質のはたらきをなすものと考えてよいのか、ということについては疑問を感じずにはいられなかった。ユダヤ教と国家神道とでは、歴史性に大きな違いがあるからである。

同様に、日本のキリスト者が、シオニズム思想・運動に影響を受け、日本民族を旧約の預言に当てはめることにより、自らが植民地主義を支援することは預言の成就である、として正当化することはできたかもしれない。しかしシオニストの側に、東アジアの動向が旧約の預言に合致するかどうかという意識はなかったのではないだろうか。したがって、同時代的相似現象であるとしても、一方的影響関係であると考えられるのではないか。また、日本のキリスト者が無批判に欧米中心主義を受け入れ、その論理を用いて朝鮮・中国支配を正当化したことは認められるとしても、本書で述べられるようにそれを現在のパレスチナ問題の遠因である、とまでは言えないのではないか、といった疑問もある。良心的・リベラルでありたいと思っているキリスト教関係者、特に無教会主義キリスト教関係者から、本書に対して、内村や矢内原の思想にそこまで厳しく批判すべき点があるだろうか、という感情的な応答がある可能性もあるのではないかと思われる。

本書は、内村や矢内原における再臨運動、再臨思想とシオニズムとを関係づけて解釈している。内村の再臨運動については、内村がその運動を展開している当時から批判的な見方があった。非科学的である、聖書絶対主義に陥っている、という批判である。また戦後の日本キリスト教史研究の立場からは、再臨運動をひとつの典型例として、内村における近代的な文化や政治社会制度に対する否定的態度あるいは無関心、無頓着に対する批判がなされてきている。これらの内村に対する批判には、内村における植民地、特に朝鮮（韓国）に対する意識の低さへの批判も含まれている。内村が、終末的な神の介入による解決を信ずるがあまり、現実の世界に対する社会的・政治的な具体的努力を放棄してしまったのではないか、という批判である。本書も、再臨運動についてはこれに近い見方である。

しかし一方では、再臨運動、再臨思想について、そのシオニズムと共鳴するような要素も含め、世俗社会の発想・やり方では戦争を止められないことに関する宗教的解決の提示である、との再評価もされてきた。内村研究に携わってきた評者の立場からは、その再臨思想を、内村における明らかなウィーク・ポイントである植民地への冷淡さと結びつけて考えることは、あまりに一方的な批判ではないか、という感情もなくはない。同様に、前述のエキュメニズムを教派間協力のもとイスラムに対抗するための仕組み、と解釈する点についても、日本でエキュメニズムを研究する立場の方は、割り切れない感情を抱かれるのではないだろうか。もちろん、現実的には本書を手にとるような、日本キリスト教史に興味をもつ読者が、

その一点のみで内村やエキュメニズムを評価することにはならないであろうと思われる。

一方で中田重治については、日本キリスト教団成立当時のホーリネス弾圧に関する罪悪感のようなものがその後の研究者にもあり、扱われにくい面があった。したがって、中田について、これまで比較的扱われてきていない部分、特に満州での活動に対する事実を確認し、そこに見られる日本中心主義を批判していることは、本書の功績と言ってよいであろう。

このように本書には、専門的な「神学書ではない」から、すなわち、日本のキリスト教や教会、キリスト教団体から距離感があり、それらを擁護する必要がないから書けたのではないか、というような面がある。このことは、外的な視点からの日本キリスト教に対する批判について、日本キリスト教の側はどう受け止めるべきなのか、という問題へとつながる。また評者にとっては、神学、キリスト教学に対する、他の価値観、一般的（世俗的）価値観からの批判に対してどう応答するか、という問題と、一連のものと感じられる。

もちろん、キリスト教組織や教会の内部的な知識があれば、本書における論述がさらに説得力のあるものとなったのではないか、と思われる部分も当然ある。たとえば、注にあがる文献等に関して、このことに関しては他にも参照すべきものがあったのではないか、あるいは、このことを言うのであればあの文献を参照元として挙げておけばよかったのでは、という点などもあるのである。しかしそれは、すべてを一人でしなければならない日本のキリスト教学・神学研究の環境の問題であり、本来協働してなされるべきことと思われる。

ここで、直接的な書評からは外れるが、日本キリスト教史という学問分野の特徴について、評者の見解を記しておきたい。日本キリスト教史研究、なかでも日本プロテスタント史という学問分野は、戦後に成立したものと言ってよいであろう。1859年を日本宣教のひとつの基点と考えるとして、山路愛山のような先駆者があるとはいえ、各個教会史や教派史ではなく日本のプロテスタント史、という観点での歴史研究が本格化するのは戦後のことであるように思われる。1859年から100年と考えても戦後の1959年である。戦前期にはまだ、日本のプロテスタント・キリスト教について、歴史として振り返り検証するだけの時間を経てはいなかった。

そしてこの戦後に成立した学問分野ということにより、日本キリスト教史研究においては、戦前への反省、なぜ戦争に反対しきれなかったのか、を解明することが、重要なモチーフとなってきた。その過程で、本書でも指摘されるような、欧米中心の帝国主義に加担したこと、また大日本帝国の侵略主義に加担したことが批判されてきている。もちろん、これらは反省・批判されるべきことである。しかし、歴史を評価するための観点が、戦争に反対したか、天皇制に抵抗したか、ということだけになってしまっては問題である。この人物は様々に活躍したが、結局戦争協力したのでキリスト教指導者としては失格である、ということで終わらせるのではなく、なぜ戦争協力することになったのか、その際のキリスト教理解がどのようであったか、本人はそのことについてどう説明しているのか、といったことについての調査と考察が必要である。日本キリスト教史を扱う者は、本書もまた、いかにして植民地支配

を肯定し戦争協力するように至ったか、との経緯を示す資料として扱うべきであるだろう。

以下、キリスト教史、キリスト教思想史の立場から、より細かく本書の内容を見ていきたい。

まず高く評価しておきたいのは、ディスペンセーショナリズム、ジェンタイル・シオニズムといった、いずれも日本のキリスト教研究のなかであまり扱われてはこなかった部分に焦点を当てていることである。

これらの問題があまり扱われてこなかったことにももちろん理由があると思われる。天皇制とキリスト教、日本の側でのキリスト教理解・受容、といった問題を明らかにする方が優先されてきた側面もあると思われる。また、イスラエル、パレスチナを扱うことによる政治性を回避したいということも大きいであろう。現在のパレスチナ問題に関して、現代日本のキリスト者になにかなし得ることがあるのか、ということになると、具体的には難しいかもしれないが、全く何の責任もないとは言えないであろうことが、本書からは明らかになる。

このことと関連して、ディスペンセーショナリズムという用語について少し確認してみたい。

本書における「ディスペンセーショナリズム」は、以下のように定義されている。

> 「ディスペンセーショナリズムにおいては、アダム以降の人類の歴史において神と人類との契約は何度かにわたって更新されていると考え、それぞれの契約に応じて救済史的な時代区分（ディスペンセーション）が定められる。そして、キリストの十字架死以前の契約はすべてユダヤ人と神との契約であり、キリストの死によって初めて異邦人（非ユダヤ人、ジェンタイル）に神の恩恵が及ぶと考える。……ディスペンセーショナリズムの大きな特徴は、神との関係において、ユダヤ人と非ユダヤ人は人類の全歴史を通じて異なる存在であると考える点にあり、最終的にユダヤ人がイエスをメシアとして受け入れたとしても、それは他のクリスチャンンとは歴史的役割を異にする「ユダヤ人クリスチャン」として区別される。つまり、そこではユダヤ人は宗教的概念ではなく、改宗してもなお区別され続ける人種的概念として捉えられているのである。」（33-34）

一方で、ディスペンセーショナリズムという言葉にはより一般的な用法もある。たとえば、キリスト教教義に関する辞書的記述では以下のようになっている。

経綸主義　Dispensationalism

「19世紀に編み出された聖書解釈の一つの方法」「聖書は最初の頁から最後の頁まで、キリストによる唯一の贖いを証ししているが、神は7段階の経綸により人類を漸進的に道いて来られた」（リチャードソン、ボウデン著、古谷監修『キリスト教神学辞典』（教文館、

2005、211-212）

（引用者注：７段階とは、エデンからの追放まで、ノアの洪水まで、アブラハムの召命まで、シナイで律法が与えられるまで、キリストの死まで、キリスト再臨まで（教会の時代）、千年王国から永遠の国までである）

この、一般的な意味でのディスペンセーショナリズムにおける「教会の時代」の意味付けにあたるのが、本書におけるディスペンセーショナリズムであると思われる。ディスペンセーショナリズムという用語は、日本語でのキリスト教の説明において頻繁に用いられる語ではないため、語法については注意が必要であるだろう。

関連して、評者の専門である内村鑑三の思想において、ディスペンセーショナリズムがどのような意味合いで用いられているか、確認してみたところ、以下の通りである。

まず、ディスペンセーショナリズム、dispensationalismという名詞としての使用は、DVD版内村全集で検索した限りにおいては、見当たらない。一方、ディスペンセーショナリズムのもととなるディスペンセーションdispensationという名詞については、何か所か使用されていることが確認できる。

もっとも古い使用例は、『内村鑑三全集36』に収録された、1883年12月宮部金吾への手紙である。ここでは、

But being taught never to doubt of God’s dispensations, I remained quite happy, …

と記され、教文館版著作集は、この部分を「しかし、神のなしたもうことには絶対に疑いをはさむな、と教えられているので全く幸福であり、……」（『内村鑑三日記書簡全集５』、教文館、1964、77）と訳している（山本泰次郎訳）。この“God’s dispensations”を「神のなしたもうこと」と訳していることでもわかる通り、「時代、時期」というよりは「経綸」「計画」に近い用法ということになるであろう。

これに続く用例は、1895年刊の“How I Became a Christian”に見られる。『内村鑑三全集3』でいえば、後から101、128、152頁（内村全集3巻は、日本語による文章と英語による文章の両方が、前からと後ろからそれぞれ収録されている。これは英文なので、後から〇頁と表記した）において使用されている。いずれも、Christian dispensationとChristianとつなげた用例である。これらの意味は、キリスト教を信じていること、といった内容である。たとえば後ろから101頁では以下のように用いられている。

Till then this earthly life was all in all to me, even under the Christian dispensation.

日本語訳は「これまでキリスト教に導かれながらも、この世の生活が私にとってまったく

すべてでありました」（鈴木範久訳、岩波文庫、2017、188）となっている。キリスト者としてのディスペンセーション、神の経綸のもとにあること、といった解釈になるであろうか。

これらの用例に対して、本書でも言及される「イエスの終末観」における例は、「時代」「時期」という意味で dispensation を用いている。

> 「……「教会」の観念は初よりキリストの計画中にあつたのではない、彼が此世に神の国を建設せんとの計画を選民の不信の故に抛棄（ほうき）せざるを得ざるに至りて新に教会時代が始まつたのである、而して教会時代の終りし後に最後の一週は来る、馬太伝二十四章は即ち世の終末の一週に関する預言である」[1]と。
>
> 此解釈は誠に聖書を解し易からしむる説明である、斯く神の定め給ひし「時代」(dispensations)を分ちて聖書を読む時は従来我等を苦めたる多くの難問題を解決する事が出来る、……」（内村、「イエスの終末観）『内村鑑三全集24』、537）

「時代」(dispensations)との表記から明らかなとおり、この用例は神の定めた時代・時期を指すものと考えられる。前記の辞書的なディスペンセーショナリズムの定義とも近いと言えるであろう。とくに、ユダヤ人の歴史的役割、という意味の用法ではない。

テキストに準拠した内村鑑三研究の立場からは、原則として、テキストに書かれている以上のことに踏み込むことはない。あくまでも、読み方、解釈のバリエーションとして、考察することになる。内村において、dispensationという語の具体的な使用は以上の例に限られているため、ことばの使用を理由として内村をディスペンセーショナリストであると解釈することには無理があるということになる。

一方で、社会的情勢や具体的できごとなどを論拠として歴史的人物の言動を解釈していく本書の論述は、刺激的でもあるが、そこまで推測してしまってよいのか、という戸惑いをおぼえるところもないではなかった。たとえば次のような描写である。

> 「この時期の新渡戸と内村の交流については明らかではないが、これらの発言の近似性は単なる偶然とは考えられない。講演のために久々に東京に来た新渡戸が、都合を併せて内村と旧交を温めたと考えても不思議ではないだろう」（156）

新渡戸稲造と内村が会った、という確実な証拠がなければ、内村の植民地に関する理解は新渡戸の理解に影響を受けているとは言えないのではないか、というのが、歴史研究の立場からの考え方である。

以下ではこのことと関連して、再臨運動と三一独立運動との関係性についての本書におけ

[1] 原文では引用部に○の傍点が付されているが、ここでは●による傍点に変更して引用している。

る考察について考えてみたい。

内村が、一年弱の期間継続した再臨運動については、教派教会の指導者と協力したこと、大規模な会場での講演を実施したことなど、それまでの内村の活動とは異なる面が見られることもあり、注目されてきた。近代的な思想を紹介した知識人として内村を評価しようとする立場からは、再臨思想の「非科学性」が批判された面もある。

再臨運動の終結について、内村自身ははっきりした説明をしていない。内村が述べていないのであるから、それ以上のことはすべて推測でしかないということになる。もちろん、当人が自らについて記しているから全て正しいとは言えないのであるが、思想研究の立場からは、「それではなぜ、そのように、後になって描写したのか」を内村のテキストに沿って考えることになるのである。また、内村による一連の連続聖書講義については、多くが文書の途中までで終えているのも事実である。福音書を扱った「ガリラヤの道」「十字架の道」、および「ロマ書の研究」は例外的であって、内村がひとつの聖書テキストを初めから終りまで網羅的に扱った文章は珍しい。そのことと対比して考えても、内村が一年弱で一連の再臨思想に関する講演活動を終えたことは、決して奇妙なことではないように思われる。

では、本書はこの問題をいかに扱うのであろうか。前述したように、同時期の社会情勢、できごとをもとに類推していくのである。そこで焦点があてられるのが、三一独立運動との関連である。すなわち、朝鮮における三一独立運動とその結果が、日本においても、プロテスタント・キリスト教への規制、弾圧をひきおこすことを警戒して、再臨運動が中途で終結することになったのではないか、と推論されるのである。

> 「…三一独立運動と内村らの再臨運動を連動した動きとして捉える見方があったとしても全く不思議ではない。」（189）
>
> 「…三一独立運動への弾圧を理由とした大会日本誘致の見直し論が浮上したとき、小崎・平岩ら世界日曜学校大会を主導していた主流派プロテスタント協会幹部は、内村らの基督教青年会館からの排除という動きを取ったのだと考えらえる。」（191）
>
> 「おそらく、内村は、金貞植の二度の訪問を経て、青年会館使用問題が単なる無教会主義に対する教義的な反発や教会組織上の保身といった問題を越えた政治性を帯びていること、そしてそれが三一独立運動に動揺する国家権力の動向とも無関係ではないことに気付いたのではないかと思われる。」（192）
>
> 「内村が再臨運動を中途半端なかたちで終えた背景には、必要以上に治安当局を刺激することを避けようとした政治的配慮があったと考えてよいであろう。」（同）

もちろん本書においても「以下の考察は状況証拠的な指摘にとどまらざるを得ない」（185）とされている通りで、それらが内村の言動を根拠づけたと断じているわけではない。

このように、社会情勢へ対応した、として内村の思想・言動を捉えると、内村や、当時の

プロテスタント・キリスト教指導者たちが、政治的動向に細心の注意を払っていた、警戒していた、というように見えてくる。批判的に捉えるならば、内村を含む日本プロテスタント・キリスト教指導者たちが、自己保全のため、朝鮮のキリスト者たちとの連帯を諦めた、ということになるかもしれない。このことを、彼らの言動は政治的であって神学的・信仰的ではない、と評価するのであれば、政治的か信仰的か、という二分法で戦前期の日本プロテスタント・キリスト教指導者を評価しようとする視点に陥ってしまう。評価を下す前に、当時の状況をできる限り詳細に知らねばならない。本書もその手掛かりとなることは前述の通りである。

一方で、本書における、再臨運動の終結と三一独立運動とを関連付ける見解が、従来の「なぜ内村は再臨運動を中途で終わらせたのか」という疑問に対する決定的な解決となるか、と言われれば、必ずしもそうではない、と言わねばならない。

繰り返しにはなるが、著者によるこの問題に対する推論は、状況証拠によるものである。内村自身から、三一独立運動と関連して再臨運動をやめた、という発言はなされていない。弟子たちからもそのような証言はなされていないように思われるが、これについては評者が細かく検証したわけではないため、断言はできない。

内村は、具体的な戦争協力が要求されるような時期になる前に死去している。「小崎・平岩ら」（191）の名前が挙げられているが、彼らの所属した日本組合教会や日本メソヂスト教会、あるいはその後の日本基督教団は、具体的な戦争協力をしている。組織を守るため協力せざるを得なかった、という側面がある一方、進んで戦争協力しているように思われる部分もある。一方、第二次世界大戦中の無教会主義キリスト教の動向については、古典的なものとして藤田若雄等（藤田編著『内村鑑三を継承した人々　上　敗戦の神義論』、『同　下　十五年戦争と無教会二代目』いずれも木鐸社、1977）、近年では黒川知文による検証（黒川「戦争の時代における無教会運動―塚本虎二と矢内原忠雄」『内村鑑三研究　第52号』、2019）がある通りである。塚本虎二や黒崎幸吉は戦争協力したとされている一方で、矢内原忠雄や政池仁、浅見仙作といった人々の反戦的言動についてはよく知られている。また、斎藤宗次郎の日露戦争時の言動に対する、内村の警告もまたよく知られているところである。結論として、内村は自らの政治的な言動に関してかなり慎重であった、ということは変わらない。また、それにも関わらず、彼のもとから反戦的言動を貫こうとする人々が輩出されてもいる。同時に戦争協力者も出ている。内村のメッセージから、つねに一元的な応答が導かれるということではないのである。

内村のテキストをどう読むか、ということについて、ひとつ参考となることがある。それは、内村が、聖書の解釈に関して、聖書を「全体として」考えねばならない、という立場であったことである。たとえば、1918年の「馬太伝第十三章の研究」では次のように述べている。

「……独り本章のみならず馬太伝全体然り否聖書全体然り、聖書は個々の言を読みて其意義を誤り易くある、然しながら其全体を読みてキリストの精神の存する処を受けん乎、我等の霊を充実せしむると共に又之を寛容ならしめ深さと共に広さを与ふる事此書の如きは他に無いのである、聖書研究の秘訣は茲にある、是れ実に何物を以ても代ふべからざる貴き事業である。」（内村「馬太伝第十三章の研究」1918、全集24、298）

内村のテキストに関しても、その該当部分を読んでいるだけでは見えてこないものがある。これは、内村の思想を専門的に研究する者としての課題であるが、シオニズム論、ディスペンセーショナリズムが、内村のキリスト教思想、あるいはのちの無教会主義キリスト教のなかでどのような位置を占め、どの程度の重みをもって受け止められていたか、ということについては、全体像のなかで考えねばならないことであるだろう。

内村のどのような部分をどのように受け継ぐか、ということについても、おそらく、無教会主義キリスト教のなかでそれなりの幅があるはずである。たとえば、戦後には、戦後の状況に対応するため、戦後民主主義と調和的な内村像を描いてきている側面があるのではないかと思われるのである。

なお、本書における、再臨運動終結を三一独立運動関連付ける解釈に関して、関根清三は次のように述べている。

「内村がいささか唐突な形で再臨運動を終えたのは何故かという問いに対する答えは、決して一筋縄で出るものではなく、彼の抱えていた複雑な諸事情と呼応して、また複雑な様相を呈せざるを得ないはずであろう。そして役重氏の政治的仮説と私の宗教的仮説は、必ずしも矛盾するものではなく、政治宗教両方の要素が相俟って、内村をして再臨運動の突然の終焉という決断に至らしめたと考えるのが妥当なのではあるまいか。」（関根『内村鑑三――その聖書読解と危機の時代』2019、筑摩書房、177）

この、関根による説明は、無教会主義キリスト教に限らず、社会的・政治的背景のなかでの、キリスト者・宗教者の言動に関する、説得力をもつ説明であるように思われる。なお関根がここでこの問題に言及したということは、とりもなおさず、関根においても、この問題が重要なものであると思わせられたということである。政治・社会情勢に対して、宗教者が語ることの意味について、関根は次のように記している。

「……伝道者の責務は、政治的次元で義戦や非戦を唱えることにあるのではなく、それは宗教者の越権に過ぎず、むしろ戦争が非なる所以を宗教的次元で顕示していくこと、そこにこそ存する。」（関根、前掲書、231）

もちろん、厳しい政治・社会情勢のもとで、宗教の次元に限定された言説が力を発揮できない、具体的行動につながらない、という問題はあるかもしれない。

この、宗教の次元と、政治的次元とのちがいをいかに考えるか、ということについて、再臨運動の解釈と並んで、評者が特に記しておきたいもうひとつの点が、「神の愛」を信じていることにより、大日本帝国政府の侵略戦争政策を結果として容認することになってしまった、という矢内原忠雄の思想に対する評価である。これは、日本キリスト教思想研究という立場からは出てきにくい観点である。本書では次のように述べられる。

> 「矢内原をして、こうした理想主義的言説の政治利用という側面への注意を怠らせたのは、彼の実質的植民論の根底にある「神の愛」への信仰であったと言える。」（235）

「神の愛」を信じ、最終的な神による解決を信じたため、受容的になってしまい、政府の不正義を見抜けない、ということであれば、キリスト教、宗教の根本的なところから認めることができなくなってしまうのではないだろうか。

なお、この観点には、高橋哲哉による昨今のキリスト教批判にも通じる面がある。すなわち、倫理的に、正義にかなうかどうかの観点から欠点がある、という理由で、信仰、宗教の内容を批判していると見ることができるからである。では、矢内原の場合に焦点を当てるとして、「神の愛」には、信じてよい場合とそうでない場合があるということになるであろうか。いったい問題はどこにあるのだろうか？「神の愛」を信じていること自体であろうか。そうではなく、自分も愛をもって他者を受容せねばならないと思った結果、社会的な問題に対しても批判し続けることができなくなることであるだろう。しかし、受容的になってしまうことが、本当に、神の愛を信じた結果なのであろうか。敵を愛せ、と聖書に書いてあるから、政府を批判しようとしなくなる、ということがあるであろうか。イエスは、「敵を愛せ」と言いながら、厳しくファリサイ派・律法学者を批判しているのである。

矢内原の言動について、政策を受けいれたことを、聖書を用いて正当化しているととることもできるかもしれないが、どうしようもない状況のなかで、それでも神を信じるという方向に希望を見出そうとしている、と解釈することもできるのではないだろうか。

そこで敢えて、「敵を愛せ」「権威には服従しなさい」という聖書のことばを用いる、ということを捉えなおす方向はあり得なかったか、と考えてみたいのである。内村も矢内原も、自らの発言については十分に慎重であった。彼らは、検閲を通過する範囲で、「わかる者が読めばわかる」表現を試みていた。また、特に内村については、所与のできごと、あるいは、既成の体制、政治や社会の体制を否定するのではなく、敢えてそこに乗りながら、その意味を変えてしまおうとすることを試みていたといえる。不敬事件を通じて独立教会からの離脱があったからこそ、無教会主義につながったこと、娘ルツ子の早すぎる死から、再臨信仰を

見出し、復活の意味を捉えなおしたこと、等である。このような、状況は変わらないなかで、意味を逆転させようとする発想を、内村は自らを失望させる国である日本に対しても用いている。

「……日本は決してイエスが私を愛して呉(く)れたやうに愛して呉れなかつた。それに係(かか)はらず私は今尚(なお)日本を愛する。止(や)むに止まれぬ愛とは此愛であらう。
〇私が日本を愛する愛は普通此国に行はるゝ国を愛する愛ではない。私の愛国心は軍国主義を以て現はれない。所謂(いわゆる)国利民福は多くの場合に於て私の愛国の心に訴へない。日本を世界第一の国と成さんと欲するのが私の祈願(ねがひ)であるが、然し乍(なが)ら武力を以て世界を統御し金力を以て之を支配せんと欲するが如き祈願は私の心に起らない。私は日本を正義に於て世界第一の国と成さんと欲する。[2]」（内村「私の愛国心に就て」1926、『内村鑑三全集29』、351-2）

「愛国心」という、国家が国民に要求することばを用いながら、その中身・意味を読み替えているのである。聖書のことばを教えることが、国家の規制を受けないのであれば、内村は聖書のことばを教えているのだ、という体裁をとりながら、国家の愛国心とはちがう愛国心を語ることができた。しかし矢内原の時代になると、旧約聖書の解釈として旧約聖書における国家について語ることさえ、規制を受けるようになっていた。それが、「国家の理想」をめぐる一連のできごとである。

本書では、内村や新渡戸、矢内原らの植民地に対する捉え方が不徹底なものであると批判されている。

「…新渡戸や内村の議論に見られる「平和的植民論」は、本人の意図に関わらず、帝国主義時代における現実の植民地政策を支えるプロパガンダとしての役割を果していたという側面について考える必要がある。」（157）

内村の、朝鮮に対する視線については、すでに多くの批判がなされてきている。内村の時代的な限界と考えてもよいであろう。同時に、帝国主義の枠組のなかで、真実に、平和的な植民（相互理解、相互交流的な）を実現したいと考え、またそれは可能であると信じ、その方向を目指そうとする意図が内村や新渡戸、あるいは賀川豊彦などにあったことも否定はできないのではないか。もちろん、現実は苛酷なものであり、平和的相互理解とは程遠いものであった。しかし、そこで諦めて、社会と断絶して信仰の殻に籠ってしまうのではないのが内村、無教会主義キリスト教の面白みであるということもできるのではないか。神を信じ、

[2] 原文では引用部に〇の傍点が付されているが、ここでは●による傍点に変更して引用している。

神の愛を信じ、赦しを信じる人間には、人間どうしの関係において徹底しきれない面があるのかもしれない。しかし、神の愛を信じ、希望を見出そうとするからこそ、人間どうしの関係を諦めず、言論による訴えを続けることができたことも確かなのではないだろうか。それが具体的・組織的な行動に繋がりにくかったことについては、日本キリスト教全体のおかれた状況や、無教会主義の特質と併せて、引き続き検討していきたい。

最後に、他の細かい気になった点をいくつか指摘して、本書評を終えたい。

・「自由主義神学」（97）という表現について

リベラルな思想をもつ神学者と、「自由主義神学」とはキリスト教研究の文脈では異なる面があることは記しておきたい。ここで「自由主義神学」とされているのはティリッヒであるが、ティリッヒが「自由主義神学者」であるかどうかは議論の余地があるのではないだろうか。

・シオニズムと無教会主義の関連について、手島郁郎が挙げられていること

「…内村のシオニズム論は、直弟子である矢内原忠雄の植民政策論に大きな影響を与えており、また、無教会主義の流れを汲む手島郁郎の「キリストの幕屋」が、一九六〇年代以降、イスラエルとの交流を深め、日本における代表的なイスラエル・ロビーとしての立場を固めていることなどを考えると、その影響を等閑視することはできない。」（118-119）

かなり早い段階から日韓キリスト教交流を再開するなど、無教会主義における社会的実践は多様である。イスラエル寄りのキリスト教理解に基づき、政治的活動にも関わる手島のような立場は、無教会の流れに属する多様なキリスト教表現の一例である。

また、「嫌中・嫌韓」（352）という当時は使用されていないであろう表現が用いられていることについても、若干の違和感を覚えた。歴史的できごとについて考える際に、現代的な感覚をそのまま当時にあてはめようとしてはいけないからである。もちろん、鍵括弧がつけられているということは、そのままの意味で用いているわけではない、という著者の意図であるだろう。とはいえ、「嫌韓」は大韓民国、韓国を前提としたことばであって、戦後の概念であることは明らかである。もっとも、現代「嫌中・嫌韓」と名づけられている言説、現象が現代に特徴的なものではなく、関東大震災時等に見られた差別と同根のものではないか、という問いかけである、ととることは可能である。そして、そのように、歴史を通して現在の認識に改めるべきものがないか、問いかけてくるのが本書の優れているところなのである。

（いわの・ゆうすけ　関西学院大学神学部教授）